

評価対象	評価項目	評価の観点	評価	昨年 評価	成果	課題
1	学習指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自ら学ぶ姿勢</li> <li>・授業改善</li> <li>・基礎学力の定着</li> </ul>	3.11	3.18	教員それぞれが授業アンケート等を参考に授業改善に取り組んでいる。コロナのために一部学習指導計画の変更を余儀なくされたが、「基学」や各種外部模試・検定試験を実施して、生徒が社会人として求められる基礎学力を身につけられるよう努めた。また、日々課題、週末課題、外部模試や検定試験等を通して目的意識を持って継続的・計画的に学習する姿勢を育むことができた。	生徒の学力をより一層向上させるためには、同一授業担当者同士はもとより、職員全体の緊密な連携と指導に関する共通理解が必要であろう。自ら学ぶ意欲を持たせるために、生徒個々の変容と成長を重視する学習指導及び評価を実践し、生徒が成就感を持てる学習機会を増やしていきたい。ICT機器の有効活用がこれからの課題であると思われる。「紙と鉛筆」も大切であることを認識しながらICTにより何をすべきかを実行していくことが急務である。
		「基学」、基礎力診断テスト、各種検定の受検、読書週間など多様な取り組みにより、生徒が自ら基礎学力の伸長と教養の涵養（自分をカルチベイトすること）を意識するよう図る。	3.16	3.23		
2	生徒指導	<ul style="list-style-type: none"> <li>・規範意識</li> <li>・人権教育</li> <li>・自他の尊重</li> </ul>	3.49	3.45	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人権教育研修会では、外部講師をお招きして、「介助犬・聴導犬とは～補助犬法について学ぶ高校生にできることとは」のテーマで全校研修会（稲荷山養護学校高等部分教室も一緒に）を実施することができた。オンライン研修となったが、研修後、生徒自ら募金活動をする者が駆けつけ、その後の全校募金活動につながった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・障がい者や他者について、興味関心のない生徒もあり生徒格差が目立った。お互いを尊重する人権感覚を育むための啓蒙活動を模索していきたい。</li> <li>・学校生活において、規範意識欠如の生徒が下級生に目立つ。精神的未発達なため、幼稚さやわがままがまかり通っていた過去を伺い知れる。関連する分掌係・委員会と連携を図り、生徒の意識改革および成長を図っていきたい。</li> </ul>
		規範意識（ルールを守ろうとする気持ち）の向上を働きかける機会を定期的に設けるとともに、お互いを尊重する人権感覚を育てる教育活動を行う。	3.38	3.36		
3	キャリア教育	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進路指導</li> <li>・自己指導能力の育成</li> </ul>	3.16	3.05	本年度も残念ながら就業体験は実施出来なかったが、学年会や外部講師による進路ガイダンス、企業の出前講座などを実施して進路について考える機会を複数回持った。早い時期から進路意識を高める取り組みを行うことで、進路選択と決定に良い影響が出ており、今後も継続して進めていきたい。	主体的に自分の人生を切り開いていけるように、自己理解、自己分析をさせる必要である。また農業高校での学びを文字化して表現できる力が必要である。今後の社会状況の変化にも対応できるキャリア教育をさらに追及していきたい。
		就業体験や講演会、適性検査などを通してキャリア教育への取り組みを進め、生徒が自らの未来について考え、将来、社会の中で主体的に生きていけることができるよう図る。	3.19	3.15		
4	社会に開かれた教育活動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域連携</li> <li>・地域資源の教材化</li> <li>・自主活動（生徒会・クラブ）</li> </ul>	2.84	2.92	生徒会:C:極一部の生徒は生徒会活動に積極的に参加できた。 昨年度は中止となった「善光寺花回廊」が縮小開催されたり、棉や伝統食材などの地域資源を活用して地域交流に取り組むことができた。また、農業クラブの各種大会や全国大会も開催され、学習成果を発表する機会が得られ生徒がかつ安くなる姿を見ることができた。	生徒会:興味関心のない生徒に魅力を感じてもらえるように指導する。 どのような状況にも対応できるように、準備を進めておくことが重要となる。 信州学については、取り組みがマンネリ化していることと、学校内で認知度が低いことが考えられ、普通科をはじめ各教科での探究的な学習への取り扱いを検討していきたい。
		「信州学」など地域の資源に着目した教育活動や各種交流活動に取り組み、地域とのつながりを意識し、将来、地域のために貢献できる人材の育成に努める。	2.97	3.08		

「評価」欄はABCDで記入して下さい。「A」=4点(たいへん良い)、「B」=3点(おおむね良い)、「C」=2点(やや悪い)、「D」=1点(たいへん悪い)。

評価対象	評価項目	評価の観点	成果と課題
5 農業教育	1年 (基礎教育)	農業科の基礎科目の学習を通して、2年進級次のコース選択において自ら積極的な選択ができるよう指導する。	基本的な知識・技術の習得に向け、生育状況の記録・観察に取り組むことができた。これにより、農業研究レポートにおいては、各クラス代表による研究発表会を実施し、各クラスの研究・指導内容の底上げが図れた。さらに、代表クラスとなった1年3組が課題研究発表会において3年と遜色ない発表をすることができ、来年度以降につながるプロジェクト学習に取り組むことができた。
	A 生産技術	作物生産技術を中心に、機械、土木系資格取得、技能習得に積極的に取り組み、関連する地域産業に貢献する人材育成を目指す。	作物生産技術を中心に、機械、土木系資格取得、技能習得に積極的に取り組み、関連する地域産業に貢献する人材育成を目指すことが計画通りできた。また、今年度は姨捨の棚田の整備活動にも参加し、地域との交流も図れた。
	B 流通経済	簿記能力検定において商業科卒業生徒と同等以上の技能を習得し、事務・販売・流通系で活躍が可能であり、かつ水稻を題材とした研究を深めて4年制大学、短大、大学校への進学もできる人材の育成を目指す。	2年時に全経簿記検定をほぼ全員取得できている。また水稻に関する研究では学会発表できるレベルの結果とともに、研究スキルを学ばせることができた。課題研究発表会でも高校生レベルをはるかに上回る内容である。当然ではあるが、計画想定は達成されている。
	C 食品科学	食品の成分分析ならびに食品加工技術を学ぶとともに、地域の農産物を生かした加工品の開発などを目指し、食品関連産業に貢献できる人材を育成する。	2年生は、食品化学、食品製造、微生物の基礎を習得する中でレポート作成を行い、まとめる力を身につけた。3年生では学んだ知識・技術を応用し、課題研究の授業で新たな加工品開発、食品成分分析など探究的に取り組み、それをまとめて発表することができた。進路については、食品関連産業へ就職する生徒もおり、今後も地域に貢献できる人材の育成に努めたい。
	D 環境科学	身近な環境についての各種調査・研究活動を意欲的に取り組むと同時に、その成果をもとに信州の環境の実態やこれからの農業についての自分たちの考えを様々な機会に発信し、地域の環境や農業を守る人材を育成する。	2年生では食品製造や食品化学の基礎を学びながら、環境にも重点を置き、食品工場排水を資源として活用する研究を行った。また危険物乙種4類合格を目指し学習に取り組んでいる。3年生も食品残渣や排水を微生物の力で分解し、植物の生育に利用する研究を行い、グループごと協力しデータをまとめた。また農業技術検定3級に8割以上が合格し、2級にも1人が合格した。
	E アグリネット ワーク	栽培基礎的な学習とその利用について考え、農業の楽しさ・食の大切さなどを地域に発信するための「農業」「園芸」を活かした交流活動を考えて実践する。活動を通して地域と社会に貢献する意識と、自らのコミュニケーション能力を向上させ、卒業後も多方面において活躍できる力を養う。	2年生は栽培プロジェクト学習をとおして、他者と協力をしながら栽培学習の基礎やレポートのまとめ方を学ぶことができた。3年生は、ほとんどの交流学習がコロナウイルスの関係で中止となってしまったが、JA親子ふれあい農業塾は2回開催することができ、農業の楽しさを地域の子供たちに教えるとともにコミュニケーション能力の向上へと繋がった。また、全体を通して遊休農地の活用を目指した地域活性化プロジェクトを進めることができた。様々な学習活動を行うなかで、他者との関係の築き方を学ぶとともに、自らが責任を持って物事に取り組む大切さを学ぶことができた。
	F 園芸デザイン	草花の栽培管理の知識・技術を身につけるとともに、それを生かした交流・販売活動を実践する。地域連携を経験することでコミュニケーション能力を養成し、地域貢献できる人材を育成する。	感染症対策に気を配りながら、地域花壇の作成や販売実習など計画していた交流学習をおおむね行うことができた。これらの取り組みを通して、コミュニケーション能力を高め、日頃の学習成果を地域に還元することができた。また、地域からは新たな取り組みの依頼があり、来年度以降の活動でも地域とのつながりを大切にしていきたい。コロナ禍が続く中、各種交流や販売実習の在り方を検討していく必要も感じている。
	G 施設野菜	施設を中心とした野菜栽培に関する知識と技術を習得し、野菜の特性や栽培に適した環境を理解する。地域農業と生産現場の担い手となるスペシャリスト養成と、地域社会に主体的に貢献できる人材育成を目標とする。	2年次は、野菜栽培に関する知識や技術が習得できるように、実習・観察・研究を野菜の生育に合わせて学習した。3年次では、プロジェクト学習を軸として、生徒が自ら学ぶことを基本とした学習を展開した。今年度もコロナウイルスの関係で、校外での販売実習や収穫祭が中止や縮小されたため、野菜の栽培計画で苦勞した。コロナ禍が続く中、作付けや販売実習の在り方を検討していく必要も感じている。
H 果樹科学	果樹の栽培管理を通じて、知識・技術ならびに態度を身につけ、地域産業の担い手を育成するとともに、地域社会に主体的に貢献できる人材育成を目指す。	新型コロナウイルス対応の中で、実習のタイミングが合わず、予定どおりに進まず苦勞した。今後このような時の対策が必要である。2年生はモモを中心に栽培調査を行った。3年生の課題研究ではモモ・ブドウを中心に新たな省力化栽培方法ならびに高品質化栽培の調査・研究を継続した。果樹の栽培・収穫および校内販売実習でも、積極的に協力しながら取り組む様子が見られた。地域農業への貢献を目指した地域密着型の活動再開が望まれる。また、栽培規模を見直し、適正な管理ができるよう検討していく必要がある。	